

うことができなかつた人々と同じ時間を共有できたことを、とても嬉しく思います。これからも、モンゴルの子どもたちにはきらきらとした笑顔を忘れずに、未来に向かって明るく進んでいって欲しいと思います。 (2年女子)

## マレーシア スタディツアー報告

2010年2月23日～28日

社会福祉学部

准教授 藤本 ヘレン

日本のソーシャルワーク人材育成において、多文化ソーシャルワーク教育が求められてきている。移民のための社会支援の必要性が明らかになってきているが、移民特有のニーズに対する理解は未だ欠けている。

日本社会事業大学では、東南アジア諸国へのスタディツアーを行っている。多文化的な対応能力を身につけるためには、第一に多様性を体験することである。今回のマレーシアへのスタディツアーは、学生が文化的及び社会的多様性が高い社会の一つを直接体験できる機会となった。



マレーシアは、非常に多様な多文化社会であり、社会福祉の制度は日本と大幅に異なる。人口は、マレー系（イスラム教）、中国系（キリスト教、仏教、道教及び無宗教）、インド系（イスラム教及びヒンズー教）の三系統の人が多い。訪問した全ての施設に、三系統のスタッフ及び入所者がいた。日本の状況を念頭におき、ペナンへのスタディツアーには二つの目標を立てた。

1. マレーシアの多元主義社会の性質と複雑性を直接体験すること。
2. 多元主義社会における多文化ソーシャル

ワークの現状と課題を理解し、体験すること。

具体的に、特定の施設を訪問して、学生がマレーシアのソーシャルワークを学び、これらの施設のマレーシア人入所者と交流・情報交換し、またマレーシアのソーシャルワークを学ぶ学生と交流・情報交換することである。

### 学生の準備

社大生は、マレーシアの施設を訪問する前に、日本の類似の施設を訪ねた。日本の施設の現状と実態に関する知識は、マレーシアにおける社会支援システムを理解するために有効であった。学生の一グループは新宿区にある点字図書館を、もう一グループは日本社会事業大学と密接な関係にある自閉症と発達障害の子どものための施設である子ども学園を、三つ目のグループは青少年のための住み込み作業所であるワカバという団体を訪問した。学生全員は、マレーシアに行く前の学習会にて訪問に関する報告を発表した。

### ツアー自体

社大生がペナンについた朝、USM大学の学生が大学のゲストハウスに来て挨拶し、一緒に朝食をとるため学生食堂まで連れていった。これは、社大生がマレーシア料理（インド・中華・マレー料理）を初めて食べた機会となった。

最初に訪問した施設は、聖ニコラス盲人ホームで、東南アジアの最も古い視覚障害者のための施設の一つである。入所者の一人が、マレーシアと



日本の学生と職員を、色々な教室に案内した。最初の教室は視覚障害児のためのものであり、二番目は言語・視覚障害、自閉症やその他の知的障害を含む多重障害の青少年の教室であった。

マレーシア、日本の学生とも、子どもや青少年、先生とコミュニケーションをとる事にとっても積極的で、創造を働かせた。マレーシアの学生は、利用者と同じ言語を話せる点が有利で、姿勢やコミュニケーションスタイルを通じて受けてきたソーシャルワーク教育が有効だった。

続いて、学生はマレーシア半島全域の会員に点字図書とオーディオブックを無料で貸し出している点字図書館と、マレーシア語の点字資料の翻訳・作成と印刷が行われているセンターを訪ねた。新宿の点字図書館を訪問した社大生は、マレーシアと日本の点字資料の印刷における重要な差に気付いた。点字図書は、両国とも同じように会員へ郵送されるが、マレーシアでは点字図書の郵送が無料となっている。

次に、パン工房、マッサージ訓練センターとマッサージの仕事現場を含む様々な職業訓練の場を見学し、訓練と仕事のあらゆる過程について入所者が学生に説明した。

聖ニコラス訪問後、全員で近くの屋外レストランで昼食をとり、お互いをもっと知りあうことができた。

次に訪問した施設はアジアコミュニティサービスというNGOのひとつであるファーストステップス乳幼児介入センター（出生後から六歳まで）であった。センターの教育、ソーシャルワークと



アウトリーチ活動について説明を受けた。

この日最後の訪問先は、ジョージタウンのアルメニアン通りにある孫文博士の資料館であった。本地域は、2006年にUNESCOの世界遺産指定を受けており、マレーシア・中国・日本の三国の歴史的なつながりを示している。

ツアーの二日目（2月25日）に、同じくアジアコミュニティサービスのひとつにあたる青少年のためのステッピングストーン作業所及び自立生活訓練センターを訪れた。本センターは、ジョージタウンより車で一時間かかり、中国系とインド系の人が多いジョージタウンと対照的にマレー系の人が多いバリクプラウにある。



到着時は丁度朝のお茶の時間で、入所者と一緒にお茶を飲んだ。マレーシア人と日本人の二人の職員は、スタッフと入所者、仕事と活動、また周囲の地域との関係について紹介した。その後、学生は混合の作業チームに分かれ、一日の作業に取り組んだ。ひとつのチームはリサイクル資源を集めるために車で村まで行き、もうひとつのチームはネクタイ染色、製紙、粘土、また収集した資源のリサイクルに関する作業に取り組んだ。

昼食の合図ですべてのチームが食堂に行き、野菜麺とお茶を食べた。昼食後、片付け作業を行い、三時にスタッフ及び入所者と学生が食堂でミーティングを行った。

日本とマレーシアの学生それぞれが、誰でも簡単に遊べるゲームを教えるように依頼を受けた。午後の部の後半は、職員、入所者、ボランティ

ア、また学生が自分の一日の仕事を紹介する時間をとった。

## ワークショップ

次の日（2月26日）のUSM・日社共同ワークショップにて、ハタ教授がUSM大学のマレーシアにおける歴史と発展について説明した。USM大学は、マラヤ大学とケバンサン大学につぐ、三番目の大学として設立された。1975年に、社会福祉課程が大学に設置されたが、当時はソーシャルワークではなく農村及び国家開発と呼ばれていた。1990年代に、三十年間の急速な経済・社会発展を経た上で、社会科学部ソーシャルワーク学科に変更された。三年間の学部課程は現在ジェネリックなソーシャルワークに焦点をあてている。実習は二つに分かれている。第一部はソーシャルワーク省や全国家族計画委員会のような政府機関、主要なNGOが受け入れ先となる。第二部は高齢者、児童、障害者施設で行う。第二部の実習は、スーパーバイザーの下でのケースワークも求められる。実習第二部において、どの学生もケースワークとグループワークを行い、結果と経験についての報告を書かなければならない。

修士号のための大学院は、教科学習または論文執筆により卒業が可能となる。USM大学では、大学院にインドネシア、バングラデシュ、スリランカから多くの学生を受け入れている。博士課程も、純粋な研究と論文のみ、もしくは教科学習と論文の組み合わせという形で卒業となる。

続いて、社大生は事前に行った施設訪問





の概要を話し、二日間に渡ってマレーシアの施設訪問で理解できた類似点と相違点について議論を進めた。マレーシアの学生によれば、日本の学生と一緒に見学ツアーを行った重要な利点は、詳細な情報を入手でき、入所者と利用者と直接交流し

会話の機会を得られたことであった。

#### 結論

マレーシアの社会福祉施設訪問を通して、学生は異なる環境におけるソーシャルワーク実践を体験でき、また日本との類似点と相違点を見出すことができた。USM大学の学生の多くはイスラム教徒で、合同のツアー中に社大生は異なる文化、宗教及び社会習慣と直面した。マレー系の学生のマレー語、インド系学生のタミール語、また、中国系学生が家庭内で主に英語を使うため中国語を話すことができないことが理解できた。社大生自身は、日本語以外の言語を話す必要性を体験できた。これら全ての経験は、未来のソーシャルワーカーの成長と発展に直接的にあるいは間接的に役立つと考えられる。